

2019. 4. 19

ウェーブ

時評



田中 均

たなかひろし 69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て（株）日本総研国際戦略研究所理事長。（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー。

グローバル人材の育て方

念だ。

グローバル化とかグローバル人材育成の必要性という場合、総論と各論で大きく異なってしまうのは日本特有の事なのか。総論では重要性を口々に叫ぶが、なかなか人材が育っていない。就職選考段階のはるか前に人材育成の投資をすることが重要であることが企業によって理解されねばならない。「急がば回れ」だ。UWCは

グローバル人材育成の必要性が叫ばれて久しい。日本は人口減少社会だし、経済成長は停滞する。よって高い成長を続ける諸国の旺盛な需要に対し日本からの貿易・投資を拡充し、海外の人材を国内に受け入れて成長を高めるしか道はない。だとすれば日本人自身が国際人たることが生き残りの条件だ。が、そのような認識が日本社会の底流になっているかといえ、全くそうではない。

グローバル人材という場合、一番大事なのは多様性を受け入れ、外国人と分け隔てなく接することができるかという点だと思う。特に日本は島国で長い鎖国の歴史を

持ち、欧州のように地続きで人種が混ざり合った地域とは本質的に異なり、国際的な人材育成には格別の困難がある。これを打開していくためには、まず外国語を習得する事や早い段階で外国人と交流することが重要となる。日本人と外国人の間に垣根を作ってしまう思考形式では到底グローバル人材ということはできない。だとすれば子供の頃から外国人とともに学び、遊ぶ習慣がつくことが大切となる。私の娘はほとんど英語もできず、英国の私立女子中学校に受け入れてもらったが、その際校長先生が、「当初英語が出来なくとも、生徒たちが日本人と接するこ

とができるだけで多様性を学ぶことになる、歓迎する」と言っているのを思い出す。そのようなことを考えると、大抵の日本人高校生を選抜し、多

くは奨学金を給付して留学支援を行っている。これらの高校生はUWCを卒業後、日本や海外の大学に入学し、その後いろいろな分野で活躍するグローバル人材に育っている。UWCの卒業生である小林りん女史が軽井沢に全寮制のインターナショナルスクール（ISA）を創設したが、2016年にUWCへの加盟が認められた。日UWCに旅立つ高校生たちの壮行会に出席するが、2年の留学の後、文字通りグローバル人材予備軍となっているのを見て本当に嬉しく思うし、このプログラムを拡充しなければならないと思う。